

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 アーザルパランド・ソホラーブ
論文題目 ペルシア語における敬語表現の研究
——日本語の敬語表現の特質を視野に入れて——
論文審査委員 糟谷 啓介、古澤 ゆう子、秋谷 治

1. 本論文の内容と構成

本論文は、日本語の敬語研究に触発された著者が、ペルシア語に見られる敬語表現の特質を歴史的文献にもとづいて明らかにしようとした研究である。ペルシア語は、語族の点からいえばインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派に属しており、その点では多くのヨーロッパの諸言語と親縁関係を有している。しかし、ペルシア語にはそれらには見られない独特の敬語表現がある。そうしたペルシア語の敬語表現は、同じ語族のヨーロッパ諸語よりも、たとえば日本語の敬語表現を参照した方がその特質がより明らかになると著者は主張する。そこで著者は、日本語の敬語研究で用いられた「言材としての敬語」と「語句としての敬語」の区別を採用し、さらに言語学で用いられる「文法化」の概念を用いて、ペルシア語の敬語表現を分析しようとする。なお、審査にあたっては、外部アドバイザーとしてペルシア語の専門家である北原圭一氏と鈴木珠里氏をお迎えした。

本論文の構成は以下の通りである。

序論 本研究の目的

第1章 問題提起

- 1.1 敬語表現に関する日本語の文献とペルシア語
- 1.2 日本語にみられる敬語の特徴
- 1.3 日本語の文献にみられる敬語表現のいくつかの分類
- 1.4 待遇表現とは何か？
- 1.5 欧米言語の敬語表現研究と B&L のポライトネス理論
- 1.6 日常会話での敬語の重要性
- 1.7 社会の変化と敬語の変化

第2章 ペルシア語の敬語表現における先行研究

- 2.1 ペルシア語文法の一部として扱われた敬語表現の先行研究
- 2.2 社会言語学の観点からなされた敬語表現の先行研究
- 2.3 タアーロフは「万能表現」である
- 2.4 ペルシア語の待遇表現における新たな構造と待遇表現に含まれる様々な表現の呼称

第3章 『シャー・ナーメ』と『ガーブース・ナーメ』に現れる敬語表現

- 3.1 『シャー・ナーメ』における敬語表現

3.2	『ガーブス・ナーメ』における敬語表現
第4章	『ゴレスターン』に現れる敬語表現
4.1	『ゴレスターン』における敬語表現
4.1.1	『ゴレスターン』が記述された歴史・社会的背景
4.1.2	『ゴレスターン』において、尊敬を表す言語要素
4.1.3	『ゴレスターン』において、謙遜を表す言語要素
第5章	『モンシャアート』に現れる敬語表現
5.1	『モンシャアート』における敬語表現
5.1.1	『モンシャアート』が記述された歴史・社会的背景
5.1.2	『モンシャアート』において、尊敬を表す言語要素
5.1.3	『モンシャアート』において、謙遜を表す言語要素
5.1.4	重要な文化的・社会的な要素を表現するアラビア語の定型表現
第6章	四つの代表作を通してみたペルシア語の敬語表現の特徴
6.1	「文法化」とまとめ
6.2	四つの代表作における尊敬語の言語要素
6.3	四つの代表作における謙讓語の言語要素
第7章	結論
7.1	研究のまとめ
7.2	問題点と今後の課題
	参考文献

2, 本論文の概要

序論では、ペルシア語における敬語表現が研究者の間でもそれほど注目されていない事実が指摘され、その研究の必要性が訴えられる。その際には、比較言語学的な親縁関係とは離れて、敬語表現を豊富に有するアジアの諸言語と比較するべきであると主張される。

第1章では、これまでの敬語研究をふまえて、日本語の敬語表現の特質がまとめられる。そのなかから著者が注目するのは、「言材としての敬語」と「語句としての敬語」の区別である。前者は文脈の規定なしに抽象的な単位として存在する敬語であり、後者は具体的な状況のなかで語用論的に表現される敬意表現にあたる。著者は、前者はソシユールのいう「言語体系＝ラング」に、後者は「言語運用＝パロール」に位置づけられると整理する。「語句としての敬語」はいかなる言語にも存在しうるが、「言材としての敬語」はそうではない。日本語における敬語の特質とは、この「言材としての敬語」が語彙の幅広い領域にわたって体系的・組織的に存在することであり、著者によれば、このような特徴はペルシア語にも当てはまるとされる。

第2章では、ペルシア語の敬語に関する先行研究がまとめられる。著者は、Bātenī、Jahāngīrī、Beeman、Rajabzādehらの研究をとりあげ、それぞれの成果と問題点を指摘する。とくに Beemanの研究 (Beeman, W., *Language, Status and power in Iran*, Indiana University Press, 1986) は詳細に論じられ、イラン社会におけるコミュニケーション様式の特徴を鋭い視点から分析したものとして

評価されるが、欧米の基準にもとづいてペルシア語の敬意表現や待遇表現が誤解されている部分もあると指摘される。最後に著者は、ペルシア語の敬語表現の分類や用語がいまだ確立していないことを指摘し、敬語研究のための枠組みを提示している。

そのうえで著者は、ペルシア文学史から四つの作品を選び、敬語表現の分析の材料にする。第3章では『シャー・ナーメ』『ガーブス・ナーメ』、第4章では『ゴレスターン』、第5章では『モンシャアート』が取りあげられ、第6章では総合的な視点から比較がなされる。ここではこれら四章の内容をまとめて報告する。

『シャー・ナーメ』は、ペルシアの王朝の栄枯盛衰を歌った叙事詩であり、10世紀終わりから11世紀はじめにかけて書かれた。この作品の大きな特徴は、アラビア語要素をできるだけ排除し、純粋なペルシア語が用いられていることである。『ガーブス・ナーメ』は、11世紀後半の作品であり、著者が自らの息子に向けて人生のさまざまな教を説いた教訓書である。『ゴレスターン』は、13世紀のイラン文学を代表する作品として知られている。当時の社会や人生観をうかがわせる187の物語が、きわめて巧みで洗練された文体で綴られている。『モンシャアート』は、ずっと時代が下り、19世紀前半に王の代理人であったガーエル・マガームによって書かれ編纂された書簡集である。

著者は四つの作品から敬語表現を拾い出し、それらを一定の枠組みのもとに分類する。たとえば、「唯一神への尊称」「2・3人称代名詞の尊称」「動詞」「複合動詞」「接尾辞」という尊敬表現の下位区分をたて、それぞれのバラエティーの変化を数値的に確認していく。

この四つの作品の敬語表現を比べると、尊敬語のバラエティーが謙遜語よりもはるかに高いという共通点がある。これは日本語と異なるペルシア語の敬語表現の全体的特徴である。しかしより重要なのは、この四つの作品の間にみられる相違である。とくに、『シャー・ナーメ』とそれ以外の三作品との違いは顕著である。それは『シャー・ナーメ』がアラビア語からの借用語を用いていないことによる。また、『シャー・ナーメ』においても尊敬語は用いられているが、その使用領域は『ガーブス・ナーメ』以降の作品とはかなり異なっている。前者における尊敬語はおもに「王、貴族、英雄」に対するものであるが、後者においては「唯一神」や「預言者」に対するものが中心となっている。つまり、アラビア語要素の有無とイスラーム的要素の多少が比例している。その一方、『シャー・ナーメ』における敬意表現の構造は比較的素朴であるのに対し、他の三作品の敬語表現はかなり複雑な構成をもつ。そこには、アラビア語要素とトルコ語要素の流入が大きな影響をおよぼしている。アラビア語、トルコ語からの借用語が敬語として用いられるだけではなく、アラビア語とペルシア語の複合語、トルコ語とペルシア語の複合語、さらに『ゴレスターン』になるとその三言語の要素が組み合わさった複合語さえ見られる。ただし、アラビア語からの借用語に比べると、トルコ語からの借用語の影響は大きくない。

これらのことを総合すると、ペルシア語において、アラビア語とトルコ語から借用された語彙と定型表現が果たした役割を考えずしては、ペルシア語において尊敬を表す表現がこれほど多様になることはなかったことが判明する。著者によれば、その際には「文法化」のプロセスが大きな役割を果たしたという。「文法化」という概念は、もともと具体的な意味を担っていた語彙要素が限定された環境で用いられることによって、しだいに文法的な機能語に転化していく過程を

指す。日本語の敬語の形成にとって「文法化」の果たした役割が大きかったことはよく知られている（「はべる」「おはす」等）。著者は、アラビア語とトルコ語からの借用語が文法化のプロセスを経てペルシア語の敬語として組み込まれていく過程を跡づけている。たとえば、アラビア語で具体的な意味を表す形容詞であったものが、ペルシア語に入ると敬語としての用法をもつようになるのが、その例である。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、「敬語」の定義と、諸言語における「敬語」の有無に関する先行研究をふまえて、ペルシア語文献にみられる敬語の存在と特徴を考察した独創性と、大部の文献の分析調査にかけられた膨大な労力の成果を評価することができる。著者も述べるように、ペルシア語における敬語の存在はこれまであまり注目されてこなかったもので、その点に注意を向けた本論文は敬語研究に一定の貢献をなしたといえる。また、それぞれの作品から丹念に敬語要素を拾い上げ、一定の枠組みのもとに整理した著者の努力は多大なものがあり、その成果はこれからのペルシア語敬語の研究への指針となりうるであろう。

第二に、その際に、日本語の敬語研究から「言材としての敬語」という概念を援用し、さらに「文法化」現象によってペルシア語の敬語の形成過程を説明するなど、方法論的にも見るべきものがある。これによって、ペルシア語においてアラビア語の敬意表現の果たした大きな影響が明らかとなった。

しかし、以下のような問題点も見られる。

論文でとりあげられたペルシア語の文献は、年代的には数百年の幅をもち、ジャンルも異なるものであるが、文献の選択の基準が明確に示されていないわけではない。そのことが、分析比較の不明瞭さに通じるのが残念である。むしろ文献相互の相違を考慮すれば、検討すべきさらなる観点が明らかになり、より深い考察につながったのではないだろうか。

また、アラビア語とトルコ語の影響について、両言語の「敬語」的表現に関するより詳細な説明が加えられていれば、ペルシア語文献にあらわれる表現の特徴と「文法化」の関係がより明確になったと思われる。この問題については口述試験において、本人から説明があり、論文に書き込まれていればと惜まれる。

さらに付け加えるなら、文献の内容に関わる内容にかかわる思想的・文献学的事象の考察に物足りなさがある。とはいえ、この点への取り組みは、おそらく本論文の目的からはずれるので、これによってすぐさま研究内容の不備とみなすことはできないであろう。

とはいえ、本論文が一定の学術的貢献をなしとげたことは確かである。日本語との比較を視野に入れたペルシア語敬語表現の研究は、日本とイランのいずれにおいてもきわめて乏しいことを考えれば、本論文の意義をきわめて大きい。学術的なレベルで日本研究にあたっているイラン人研究者がきわめて少ない現状で、著者の研究はイランの学会に価値ある貢献をなすものといえる。また、日本でのイラン研究という点でも、ペルシア語・イラン文化において重要な意味をもつ敬語表現の特徴をこのような形で示したことに對して、学術的評価をあたえるべきである。

